

災害報道資料のアーカイブ化と活用の試み

～ NHK放送博物館特別展「東日本大震災 伝え続けるために」の取り組みを中心に～

メディア研究部 入江さやか / 東山一郎
東日本大震災プロジェクト事務局 三森 登

(NHK 放送文化研究所 2018 年 4 月「放送研究と調査」より写真イラスト共に全文転載)

2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災では、NHK は最大限の態勢で震災報道に取り組んだ。東北の各放送局や震災報道に関わった職員の手元には、取材メモや写真、被災者から寄せられた要望・意見など多くの資料が残されていた。これらの資料は、未曾有の大災害の報道の背景を伝える貴重な「記録」であり、「記憶」でもある。NHK ではこれらの資料を収集・整理し、NHK 放送博物館（東京都港区）で開催した特別展「東日本大震災 伝え続けるために（2017 年 3 ～ 9 月）」で、その一部を公開した。こうした取り組みは、NHK で過去に例がない。本稿は、震災報道に関する資料の収集・アーカイブ化から展示に至る一連の取り組みを総括し、これらの資料の今後の活用についても展望するものである。

I はじめに

～NHK の東日本大震災の報道～

2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災では、NHK は地震発生直後からテレビ・ラジオの全 8 波で地震と津波に関する報道を開始した。13 日までの 3 日間はすべてのチャンネルで震災報道に徹し、総合テレビ・衛星第 1、ラジオ第 1 では 1 週間・24 時間体制で震災報道を継続した¹⁾。

地震発生直後から NHK の本部、各地の放送局の記者・カメラマン・ディレクター・アナウンサーなど 600 人を超える職員が現場に入り、ヘリコプター 4 機、衛星中継車 17 台が投入された。放送系の職員だけでなく、総務や営業などの職員、関連団体からも大規模な応援派遣が行われ、最大限の態勢で震災報道に取り組んだ。

NHK は、被害を伝えるニュース・番組だけでなく、被災地に向けた「生活情報」や、障害者向けの字幕放送や手話放送、外国人向けの同時通訳による 2 か国語放送のほか、ネットを活用した安否情報の提供、総合テレビやラジオ

第 1 のライブストリーミングなど、あらゆるメディアを使って情報を発信した。

震災から 7 年が経過したが、現在も被災地の状況を伝え、被災者を支援するための放送や関連事業などの取り組みは継続している。

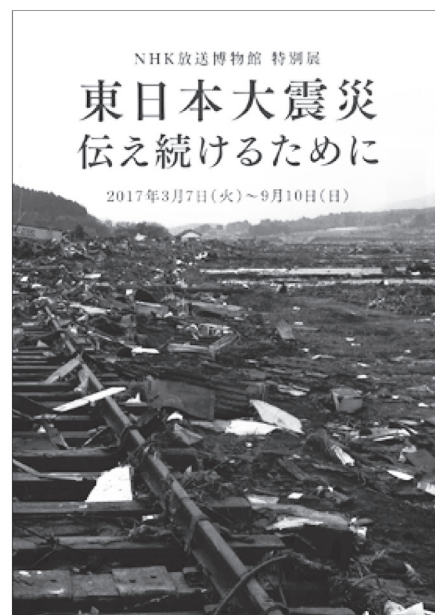
震災報道に関わった職員の手元や東北の各放送局には、取材メモや写真、被災者から寄せられた要望・意見の FAX など多くの資料が残されていた。これらの資料は、未曾有の大災害にどのように向き合ったのかを伝える貴重な「記録」であり、伝え続けていくべき大切な「記憶」でもある。NHK ではこれらの資料を収集し、時系列・項目別・地域別にアーカイブ化し、2017 年 3 月 7 日から 9 月 10 日まで、NHK 放送博物館で開催した特別展「東日本大震災 伝え続けるために」においてその一部を公開した²⁾。

本稿は、震災報道に関する資料の収集・アーカイブ化から展示に至る一連の取り組みを総括し、これらの資料の今後の活用についても展望するものである。

II 震災報道アーカイブ構想

「震災報道アーカイブ構想」が持ち上がったのは、震災発生から 5 年に向けて、番組・キャンペーンの展開を検討していた 2015 年 11 月ごろだった。NHK の報道局から東日本大震災プロジェクト事務局に持ちかけられた。

東日本大震災プロジェクト事務局とは、震災発生後に設置された部署で、震災関連の番組やキャンペーンの全局的



特別展のチラシ

な取り組みの調整にあっている。定時番組として担当しているのは『明日へつなげよう』『あの日 わたしは～証言記録 東日本大震災～』など。毎年3月11日には、生放送番組『特集・明日へつなげよう』を制作している、また、「花は咲く 東北に咲く」などの復興支援のキャンペーンにも取り組んでいる。

2万2,000人を超える死者・行方不明者³⁾、東京電力福島第一・第二原子力発電所の事故。「未曾有」という言葉では形容しきれない、日本がかつて経験したことのない大震災。NHKにおいても放送現場はもちろん、技術・管理・営業などすべての職場で、想定していたマニュアルを超える「かつてない規模・態勢」に対応にあたった。それぞれの職場で繰り広げられた試行錯誤——そうした記録を、いつか来る「次なる大災害」に備えるための“教科書”として役立てられないか。つまり、職員たちの記した生の記録・資料を、系統立てて保存することで、あの日“何ができたのか”、そして“できなかったことは何か”を検証する一助になればと考えたのが「震災報道アーカイブ構想」の発端であった。資料収集は2016年春から本格的に開始した。

これらをどういう形でアウトプットしていくか、議論をしていくなかで、職員の研修用の資料やミニ番組の制作のほか、外部に広く公開することも検討の対象になった。それが今回の「放送博物館での特別展」へつながることとなった。

Ⅲ 資料の収集・データベース化

1. 資料の収集

一口に「災害報道の資料の収集」と言っても、容易な作業ではなかった。報道の現場では、誤って古い情報を放送にのせてしまうことを避けるため、手書きの原稿やメモ、自治体からの発表

資料などの「紙モノ」はすぐに廃棄してしまうことが多い。まして、震災から5年が経過している。一体どれだけの「資料」がどこに残っているのか、手探りの収集作業が始まった。

まず報道局で、当時現場で取材にあたった記者・キャスター・カメラマンなどの職員に、震災関連の資料の提供を広く呼びかけた。その結果、個人の取材メモ、写真や動画、中継で使用した「手書きのパターン（フリップ）」、被災者から寄せられた救援を求めるFAX、など約120点の資料が集まった。報道以外の部署や地域放送局にも資料が残っているに違いない。しかし、日々の業務に忙しい地域放送局に対して、「資料があればお寄せください」という「お願い」だけではどうしても限界があると考えた。

そこで2016年夏、当時の資料が残っている可能性が高い仙台局・盛岡局・福島局に直接足を運び、「探索」をさせてもらうことにした。放送以外にも技術・企画編成・営業など各部署の協力も得て、居室や地下の倉庫などで震災当時の資料を探し求めた。

各放送局の協力により、さまざまな資料が見つかった。被災地の「前線」に置かれていた分厚いファイルには、取材にあたったデスクや記者の「引き継ぎメモ」が大量に残されていた。一見事務的な「メモ」の中に、被災者に向き合ったデスクや記者の内面の葛藤が記されていた。各放送局で受け付けていた「安否情報」や被災者向けの「生活情報」のファイルは、それぞれの立場で懸命に被災者を支えようとしていた職員やスタッフの熱意をうかがわせるものであった。福島局の地下の倉庫には、発災から約3か月後、原発の状況もまだ安定しているとはいえない2011年6月に福島局から中継で放送した『今夜も生でさだまさし～がんばらんば！

福島』で使用した手書きのホワイトボードが、5年間消されことなく大切に残されていた。ちなみにこのホワイトボードは、絵や文字が消えないように養生して東京まで搬送し、アクリルケースを被せて特別展の会場で展示した。

仙台局は2018年に局舎移転を控えておりさらにNHKの組織全体で「ペーパーレス化」が推進されたことを考えると、2016年のこの時期が、震災関連資料収集の「ラストチャンス」だったといえるかもしれない。

2. 資料の整理と分類

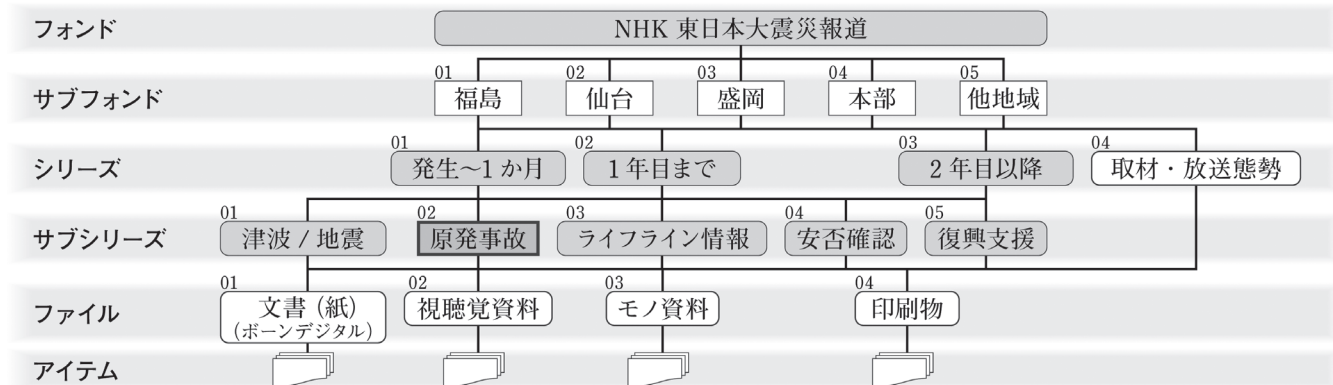
報道局と東北3局などの協力で、230点を超える資料が集まった。手帳、ノート、ファイル、デジタル媒体、衣類などが詰まったダンボール箱が目前に積み上がっていた。次なる問題は、これらをどのように整理し、活用するかということだった。

そこで、企業の資料の収集・保存・活用の専門家であるアーカイブズ工房の松崎裕子氏とレコードマネジメントコンサルタントの齋藤柳子氏（両氏ともに日本アーカイブズ学会 登録アーキビスト）に依頼し、資料の体系的な整理と目録の作成を行った。

NHKの災害報道や組織の構造を踏まえたうえで、1994年に国際アーカイブズ評議会（ICA: International Council on Archives）で定められた、記録資料を分類し体系化する手法の国際標準「ISAD (G)」に基づき、収集された資料を図1のように体系化した。「部署」「時期」「分野・内容」「資料の種別（紙・デジタル媒体・物品など）」ごとに分類し、各資料には、この分類に応じた番号を付してデータを一覧できるように整理した。

また、「前線」に置かれていたファイルなどには、取材メモや自治体の発表

図1 国際標準 ISAD (G) による震災資料の体系化



【目録の体系化】

- ・ 過去からの記録の目録を作成するにあたり、その記述方法は、国際アーカイブズ評議会 (ICA) で、1994年に定められたアーカイブズ記述の国際標準である ISAD (G)^注に準拠する。この方法は、記録が生み出されたコンテキストと記録全体の構造を記述するために開発されたものであり、資料群を階層化した多階層の記述を特徴とする。
- ・ 記録を生み出す総体をフォンドとし、その配下にシリーズ→ファイル→アイテムと体系化される。すなわち、各アイテムに関する記述を、サブフォンド、シリーズ、サブシリーズ、ファイルのレベルの記述と相互にリンクさせ、上位下位構造内を自由に往来可能とするツリー構造を構成する。フォンド全体を総括するために、各階層の2桁の数字を目録のIDに反映する。

注 [http://www.icacds.org.uk/eng/ISAD\(G\).pdf](http://www.icacds.org.uk/eng/ISAD(G).pdf)

文など雑多な資料が1冊に綴じられていた。このような資料については、ファイルの中身を精査し、「目次」にあたる「鑑」^{かがみ}を作成して巻頭に挿入し、内容が一目でわかるようにした。こうした整理・体系化により、資料活用の途がおぼろげに見えてきた。

3. 資料の分析

前記の作業の結果、資料は162件 (アイテム) あることが明らかになった。「安否情報」など同一タイトルで複数のファイルがある場合は、1件と数えている。

これらの資料が作成された時期ごとに分類したところ、「地震発生～1か月」の資料が34%で最も多く、次いで「1年目」までが19%、「2年目以降」が15%だった。

資料の内容については、「地震・津波」の被害に関する資料が20%で最も多く、「生活情報 (ライフライン情報)」が17%、「復興支援」が14%だった。「原発事故」に関する資料は7%で、大半が福島局に保管されていたものだった。本部・各局から収集した資料の内訳を図2に示す。ただし、これはあくまで今

回収できた資料を要素別に分類した結果であり、本部・各局の放送内容の割合を反映したものではないことに留意が必要である。

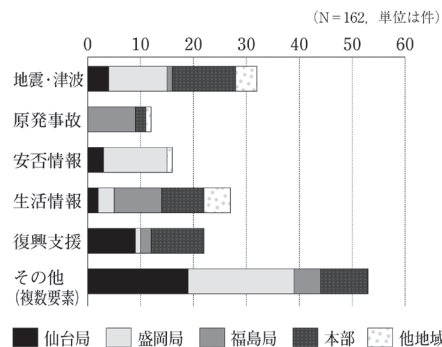
これらの資料の整理・体系化には約2か月を要したが、作業を終えた2人の専門家からは「この資料群は、未曾有の震災、原発事故のなか、NHKの総力により、緊迫した状況で作成された活動記録であることがわかる。東日本大震災報道アーカイブは、単なる報道記録ではなく、新たな組織内態勢が生み出されたり、記者と取材先の人々との心の交流もうかがえる貴重な資料群であると思われる」との評価を得た。

IV 特別展に向けた展示物の検討・選択

収集した資料の活用、とりわけ資料の公開については、NHK 放送博物館がその候補となり、博物館とNHK 放送文化研究所⁴⁾を中心に展示の準備を始めることとなった。

「特別展」で何を展示するのか、展示構成の具体的な検討を始めたのは、各部署から集まった資料群をつぶさに見始めた2016年10月以降であったが、来場者に何を感じてもらいたいの

図2 本部・各局から収集した資料の内訳



か、展示の目的は何かという点では、資料群を見る前におぼろげな結論にたどり着いていた。常設展示で、放送の歴史のひとつとして震災報道の記録をすでに展示していることもあり、特別展では、NHKがどのような震災報道を行ったのかといった、NHKが主語になるような展示はすべきではないと考えていた。そして、震災から6年のタイミングで東京の放送博物館で展示を行う目的は、被災地以外の人々のなかで震災というできごとを風化させないことと、改めて記憶にとどめてもらうこと以外にないように思えた。また、風化させたくない「震災」とは、地震と津波、そして被害という事象だけでなく、被災された方々の悲しみや立ち上がろうとする気持ち、葛藤など、人々の思いも含め

たことなのだろうと考えていた。

実際に、整理した162件の資料（以下、アーカイブ資料と呼ぶ）やその他の関連資料⁵⁾に目を通していくなかで、いくつか思うことがあった。それは、

- ① 発災直後に被災地に入ることができた人は限られている。現地に入った取材スタッフだからこそ見て、聞いて、感じることもできたこと（記録というよりも記憶的なもの）をとおして、震災の実態をより感じ取ってもらえるはずである。映像よりも「言葉」が心に刻まれる可能性もある
- ② 取材や報道を通じて得た資料は、NHKの報道の記録でもあるが、被災地や被災した方々が遭遇した実態を示す資料でもある
- ③ 被災地の人々はテレビの空撮映像ではなく、自らの目で地震や津波を見た。同じ目線で撮られた地震や津波の映像が重要である

といったことだった。どれも当たり前のことなのだが、「NHKの持つ記録や記憶をとおして、震災の実態を伝える」という展示の方向性に結びついた。

目的と方向性を踏まえつつ、アーカイブ資料から展示すべきものを選択するとともに、アーカイブ資料以外の映像資料、番組資料を見る作業を行いながら、展示構成を検討していった。発災当日と直後のできごとだけでなく、人々の思いをも含めて展示を構成するため、震災から6年の時系列にある程度沿った展開に落ち着いた。ごく簡潔に示すと、次のような4部からなる展示構成である。

特別展

「東日本大震災 伝え続けるために」

- 1. 3月11日 あのと き 何が起きたのか
- 2. 未曾有の大災害 明らかに
- ① 明らかになる大災害の実像

- ② 命を暮らしをつなげるために
- ③ “見えない”被害 どう伝える
～東京電力福島第一原発事故～
- 3. 震災6年～震災を伝え続ける
 - ① 被災地からの声
 - ② 定点映像
 - ③ ところフォト
- 4. いつか来る大災害に備えて

特別展では、最終的に映像も含めて約100点を展示したが、この展示構成の段階ではアーカイブ資料を中心に、3分の1程度しか目処が立っていなかった。このあと、▶現地で取材した記者やカメラマンなどに手記を依頼する、▶動画から静止画をキャプチャーしてパネルを作成する、▶模型などの立体物を入手する、など新たに資料を作る・借りる作業を経て、次章で紹介するような特別展の展示となった。

V 展 示

特別展の会場は、NHK 放送博物館3階の企画展示室であった。2016年のリニューアルで100㎡弱の広さとなったもので、リニューアルオープン以後、4回目の企画展である。以下では、展示構成に沿ってそれぞれのコーナーの概要と、いくつかの展示資料を紹介していく。



特別展会場（企画展示室）

1. 3月11日 あのと き 何が起きたのか

特別展の最初のコーナーでは、タイトルどおり、発災当日に現地で実際に起きたことを的確に伝えようと試みた。そのためには、映像による展示で、

それもなるべく取材者が手持ちのカメラで撮影した映像、被災地の人々と同じ目線で撮られた映像を用いて、現地の緊迫感を伝えようと考えた。

NHKが沿岸部に設置していたロボットカメラや視聴者などがとらえた地震の揺れや津波の生々しい映像は、発災後しばらくは通信や移動の手段が遮断されていたこともあって、テレビで見る機会がそう多くはなかったと考えられる。視聴者が撮影した映像も含めNHKが保存している映像資料の中から、NHKスペシャルで放送されたもの⁷⁾やニュース映像を中心に「はげしい揺れ そのとき…」「押し寄せた大津波」「ロボットカメラがとらえた津波」「首都圏で何が起きたのか」という4つのテーマ・各2分程度の映像クリップに再編集し、4台のモニターで映し出した。



発災当日の「地震」「津波」の映像展示

地震や津波の展示映像は、生々しい画だけでなく、建物が激しく揺れる音、物が壊れる音、「早く」という叫び声、悲鳴、サイレンといった生々しい音も伴っていた。狭いスペースで、これらの現地の音を的確に伝えるために、このコーナーでは指向性のあるスピーカーを使用し、音の干渉を防いだ。

2. 未曾有の大災害 明らかに

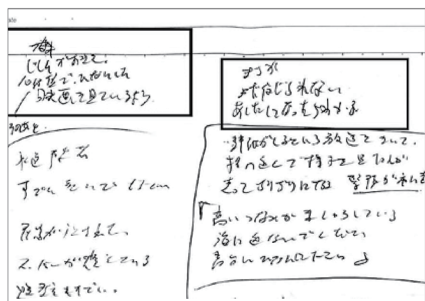
2番目のコーナーは、発災翌日以降、徐々に明らかになった各地の被害状況の実態を振り返るコーナーと位置づけていたが、展示スペースに限りがあるなかで、広域で長期にわたった被災の状況をもれなく伝えることは困難だった。網羅的な形ではなく、深く心に刻ま

れるような伝え方は何か。それは、被災の現場に入った取材スタッフや被災した人々だけが見て聞いて感じたこと、断片的であっても、彼らしか持ち合わせない「記録」と「記憶」を展示していくことだと考えた。

① 明らかになる大災害の実像

ここでは、中央の展示台に取材メモや引き継ぎメモなどの文書資料を置き、壁面では取材者の手記と写真の展示を行った。

3月11日、盛岡市の岩手県警記者クラブで取材していた記者のメモからは、混乱し断片的な情報しか入ってこないなかで、刻々と死者・行方不明者の数だけが増えていく様子がかげえた。宮城県気仙沼市で取材していた記者のノートには、「映画を見ているよう」「まだ信じられない」といった文字が見られた。



発災当日の取材ノート
(宮城県気仙沼市)

壁面で展開した記者やカメラマンによる手記は、既存の原稿に加筆を依頼したり、新たに書き下ろしてもらったりしたものである。集まった手記はみな、震災から約6年を経過した時点でも彼らの記憶に強く刻まれていたできごとで埋まっていた。彼らが見て感じた状況を示す映像を探し、映像から静止画をキャプチャーし、手記とあわせて展示した。

その中から2つの手記と写真を紹介する。



取材者による手記と当時の状況を示す写真

3月13日の朝、自衛隊に同行し初めて宮城県南三陸町に取材に入った記者は、「壊滅した街に立って」と題して次のように記した。

「……がれきの山を越えた瞬間、突然、視界が開けた。その先には何もなかった。およそ人間が造ったものは形が残っていなかった。無残な骨組みだけの建物、あり得ない形に曲がった線路、海岸から3キロも離れた地点に船が横倒しになっていた。そして、自衛隊が黙々と遺体を運んでいた……」



宮城県南三陸町の高台から見た町の中心部

次に示すのは、3月25日、多くの子どもたちが犠牲になった宮城県石巻市の大川小学校を取材した記者による手記「壮絶な命の現場」である。

「次々に遺体が運ばれてくる。顔は泥だらけで黒ずんでおり、家族らが近くを流れる小川の水を運び、その水で泥を落としていた……」

女の子の遺体の長い髪には枝やごみが絡みつuki、親が涙を流しながらとっていた。強い葛藤に悩まされながら、デジカメをまわした。



積み上げられた児童のランドセルや体操着
(宮城県石巻市 大川小学校)

一人の男性に「やっと来たかNHK」と吐き捨てるように言われた。当時、周辺に捜索隊は少なく、住民の多くは行方不明のまま。大規模災害での情報の格差は支援物資の偏りだけでなく、不明者の捜索にも影響を及ぼす……」

取材前線の引き継ぎメモ

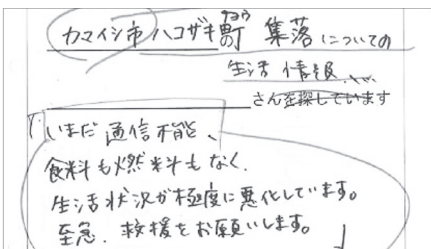
被災地の各所には取材の前線基地が設けられ、全国のNHKの放送局から記者やカメラマン、ディレクターなどが応援で入った。前線では応援者が入れ替わるたびに、引き継ぎメモが作成されていた。取材先の情報や安全管理などの業務について書かれたメモの山のなかに、記者やカメラマンがどこかに書かすにはいられなかったのだろう、個人的な思いを記したメモも含まれていた。

「……コンクリートが簡単に崩れたり、がれきの山ですらない、妙に広い更地のような被災地で、理解できない津波の破壊力に……なぜこんなにたくさんの人が死んだのか、なぜ楽しみにしていた息子の中学校の入学式にも出られずに怖い思いをして死なないといけなかったのか、これからずっと考えていく……」

これは展示した引き継ぎメモ（岩手県釜石市）の中に綴られていた若い記者の実感である。

NHK に寄せられた情報

NHK の各放送局には、震災発生直後から、被災地の窮状を伝える声や救助を求める声、全国からの支援の申し出など、さまざまな情報が電話やFAX、メールで寄せられた。これらの資料からも、広範囲に及んだ被害の実態と被災者の過酷な状況が浮かび上がった。



被災者の声を記録したメモ（盛岡局）

② 命を暮らしをつなげるために

被災地では、停電や避難などによって、多くの人たちがテレビを見ることのできなかった。そこで頼りにされたのは、ラジオだった。

震災が発生した日の深夜、仙台局のアナウンサーは、安否情報や地震情報を伝えながら、不安な夜を過ごしている人たちに、こう語りかけた。「ともに助け合うというのは、こういう時のためにある言葉だと思います。……東北地方の皆さん、ここは助け合ってください。……仙台の日の出は6時53

分です。あと4時間ちょっとで外が明るくなってきます」

特別展の会場では、仙台局に保存されていたこのラジオの音声を再生したほか、被災地の方々に向けて放送した安否情報と生活情報に関する資料を展示した。「血行をよくする体操」「エコノミークラス症候群の予防」を呼びかける原稿には、心身ともに厳しい避難生活の状況が反映されていた。

③ “見えない”被害 どう伝える

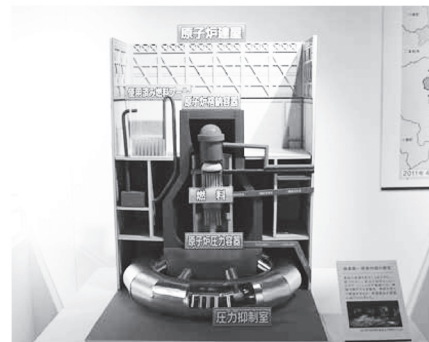
～東京電力福島第一原発事故～

電源の喪失、爆発、拡大する避難指示、放射能への不安……。被害・影響は日を追って拡大し、東京電力福島第一原発事故は過去に例を見ない原子力災害となった。事故はいつ収束するのか、いつまで避難が続くのか。情報が限られるなか、放送は何を伝えるべきかが問われた事故でもあった。

原発を継続的に取材していた記者が、1号機の水素爆発（3月12日）の際に記したメモを見ても、「何かあった（ようだ）」「1号き（ではないか）」など、不確定な情報しか入手できない状況がわかる。

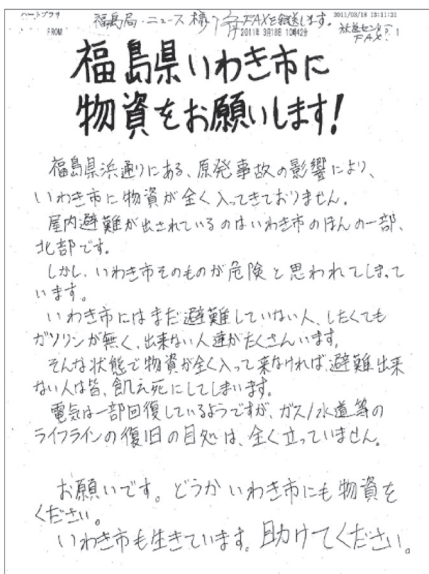
事故の現場を見ることができない、近づけない。状況が判然としないなか

で、ニュースや番組では、情報の断片をかき集め、原子炉の模型を使った解説などを通じて、原発事故の実態を伝えようとした。



福島第一原発のスタジオ解説用の模型

原発事故の状況が判然としない一方で、事故の影響は周辺の地域に拡大していた。避難指示区域周辺の福島県いわき市や相馬市などの自治体では、支援物資が入らず、医療機関も混乱をきたしていた。NHKには「原発周辺の地域の過酷な実態を伝えてほしい」という声が多数寄せられた。



福島県いわき市の住民から寄せられたFAX

原発事故は津波による被害者の捜索にも影響を与えていた。福島局ニュースデスクの手記（「廃墟と化した街」）がそのあらましを伝えている。

<p>メモ左上部分拡大</p> <p>① 16:00すぎ ふくしまけんけい(から入った)わたのような(ものが空から降っている。)</p> <p>② 何かあった(ようだ。)(地元の)TV(でも映って)1F,2(福島第一原発1号機、2号機)のあ</p> <p>③ (今、)ERC(緊急時対策室)保安院。何かは何かがおき。けむりが上がった 何かおきてい</p> <p>④ 給水ポンプ、(の)モーターの油、ぬりよう(わたのようなものは)はいかんの断熱材あわ</p> <p>{ はなれたところ、7km - 高めの値 過</p> <p>(爆発は)1ごう2ごうの中かん</p>	<p>未確認情報ですが、1号機原子炉建屋の爆発の<デスクより(福島局からの情報)></p> <p>① 16:00すぎ ふくしまけんけい(から入った)わたのような(ものが空から降っている。)</p> <p><1号機建屋の骨組みをTV映像で確認後、保安院でヤのくべ かくのうききはぶじろしんにある水が少なくなって発生した水じ水蒸がさんそと結びついてばくはつ → かくのうきき内はばくはつはなし。</p>
<p>メモ左下部分拡大</p> <p>⑤ こうてつせいのかくのうき たてのくべ かくのうききはぶじろしんにある水が少なくなって発生した水じ水蒸がさんそと結びついてばくはつ → かくのうきき内はばくはつはなし。</p>	<p>3月12日の午後8時半頃から官邸で枝野官房長官</p>

福島第一原発事故取材した記者のメモ（右側は手書きのメモを解説した補足説明）

「2011年4月14日。原発事故の影響で警戒区域となったこの町に、事故後初めて取材に入った。……津波の被害を受けた沿岸部の請戸地区では、警察による行方不明者の大規模捜索が行われていた。……静寂を破り、警察の無線が遺体の発見を告げた。震災から1か月以上もこの地に放置された人々の無念はどれほどのものか。何よりも守られなくてはならない命の尊厳を、目に見えない放射線がズタズタにしていた」



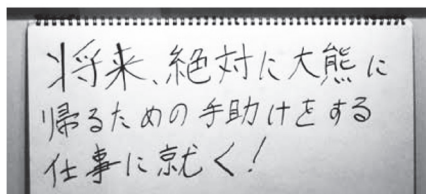
沿岸部での捜索活動（福島県浪江町）

3. 震災6年～震災を伝え続ける

このコーナーでは、被災された方々の悲しみや立ち上がろうとする気持ち、葛藤など、人々の6年間の思いを、NHKの番組や取り組みを通じて伝えようとした。特に『被災地からの声』『定点映像』『こころフォト～忘れない～』を取り上げたのは、被災地を長期間にわたって見つめ続けている番組や取り組みであることと、被災した方々の発する短いメッセージの中に強い思いが凝縮されていると感じたからである。

① 被災地からの声

『被災地からの声』⁷⁾は、仙台局が震災の9日後から続けている番組である。被災地で出会った人々に「いま一番言いたいこと」をスケッチブックに書いてもらい、テレビカメラに向かって思いの丈を語ってもらう。そのなかから宮城・岩手・福島の被災者が記したスケッチブックを6点、展示した。



『被災地からの声』のスケッチブック

このスケッチブックを書いたのは、福島第一原発が立地する福島県大熊町の中学3年生。放送では「研究者になって、放射性廃棄物を処分する手助けができたらと思います……みんなが安心して帰れる大熊町をつくる手助けをしたいです！」と力強く語っていた。

② 定点映像

NHKでは、震災の発生以来、同じ場所から同じアングル（定点）で町並みの変化を撮影し続けている⁸⁾。がれきに覆われた町がどのように変わっていくのか、地震や津波の影響、そこから立ち上がろうとする人々の営み、そして、被災地の「息づかい」が記録されている。展示では、岩手県山田町、宮城県気仙沼市、南三陸町などの定点映像を約3分のクリップにまとめて紹介した。気仙沼市鹿しし折おり地区の映像では、津波で内陸に打ち上げられた大型船が撤去され、かさ上げが進んでいく様が記録されていた。



定点映像（宮城県気仙沼市鹿折地区）

震災直後に岩手県釜石市を取材したカメラマンが、「町を埋め尽くしているのはただの瓦礫ではなく、『失われた日々の暮らし』だと気付かされた」と手記に綴っている。この定点映像も、単なる町並みや風景ではなく、瓦礫の中から人々の「暮らし」が立ち上がろうとしていく姿をとらえた、後世への貴重な記録ともいえる。

③ こころフォト

亡くなった方に寄せる家族のメッセージを思い出の写真とともに伝える『こころフォト』⁹⁾のコーナーは、同じ社会に生きる人間として、突然、大事な人を失ってしまう悲しみ、やりきれなさを少しでも共有することがあっていいのではないかと、という思いを込めた展示だった。



『こころフォト』の展示

『こころフォト』は、失われた一人一人の命の尊さを忘れないために、また、残された方たちがどのように生きようとしているのかを伝えるために、NHKが写真とメッセージを募集し、放送とウェブサイトで紹介する、震災2年を機にスタートした取り組みである。額装した写真とメッセージ、VTRの2つの形式で展示した。会期中、この展示をじっくり見つめる若者の姿が印象に残っている。見た方の心に何かを残せたのではないだろうか。『こころフォト』はNHKのウェブサイトで公開している。

4. いつか来る大災害に備えて

特別展の展示を構成するにあたって

は、できるだけNHK が主語にならないよう留意したが、最後のコーナーだけは、東日本大震災の教訓と反省に立ち、NHK が災害報道・減災報道をどのように改善してきたかをコンパクトにまとめた。改善点をまとめたパネルとともに、東京・渋谷のニュースセンターで2016 年末まで使用されていたニュースの「送出卓」を展示した。「送出卓」とは、全世界・全国から入ってくる中継映像や編集された映像を臨機応変に切り替えて放送に出していく装置で、いわばニュースの「司令塔」である。東日本大震災のニュースもこの送出卓から放送された。災害報道の不断の改善を誓うものとして、このニュース送出卓を特別展の締めくくりとした。



「震災を伝えた」ニュース送出卓

VI 放送との連動・関連イベント

1. 放送との連動

特別展の開催にあわせ、番組やニュースでの展開も行った。開催初日の3月7日には、全国ニュースで放送。NHKの広報番組『どーも、NHK』（総合テレビ）では、被災者の反応なども独自に取材し、10分余りのVTRで特別展の見どころを紹介した。

また東日本大震災プロジェクト事務局が担当する番組『明日へつなげよう』（総合テレビ）でも、特別展の取り組みを、キャスターのレポートで伝えた。

2. 関連イベント

特別展に連動して、防災・減災意識の向上につなげようと、さまざまなイベ

ントも展開した。

特別展開幕直後の2017年3月12日には、NHK 放送博物館で「3.11 その時キャスターは～命を守ることば～」と題して、東日本大震災発生時に東京のスタジオからニュースを伝えていた横尾泰輔アナウンサーの講演会を開催。横尾アナは、緊急報道に向き合うキャスターの思いや、震災の経験を踏まえた災害報道の改善の取り組みなどを語った¹⁰⁾。5月6日には、福島県で開催されたイベント「公開復興サポート」の会場で、記者やカメラマンの手記など特別展の資料の一部を利用した展示を行った。

その後も、NHK 放送文化研究所研究員による講演「NHKの災害報道～いのちとくらしを守るために～」（5月）、NHK ニュースに出演している気象予報士による講演「気象災害から身を守るには」（7月）を開催した。



8K アニメ『あの日まで』の一場面 (NHK メディアテクノロジー提供)

9月2日には防災の日にあわせて「8K 人形アニメーション『あの日まで』トーク&ビューイング」を企画した。『あの日まで』は、東日本大震災の津波で3人の子どもたちを失った宮城県石巻市の家族をモデルとした作品で、「NHK メディアテクノロジー」が8Kの撮影・編集技術の研究の一環として制作した。当日は、作品のモデルとなった宮城県の遠藤綾子^{りょうこ}さんから、大震災の経験や大災害への備えについて話を聞いた。このイベントの様子は、9月8日の『おはよう日本』や「NHK NEWS

WEB」でも詳しく伝えられた。

VII 来場者の反応

～アンケートから～

特別展の開催期間中のNHK 放送博物館の来場者数は6万4,952人であった。期間中、特別展に関するアンケートを実施したところ、来場者の5%にあたる3,360人から回答を得た（図3）。

図3 印象に残った資料や展示物（複数回答）

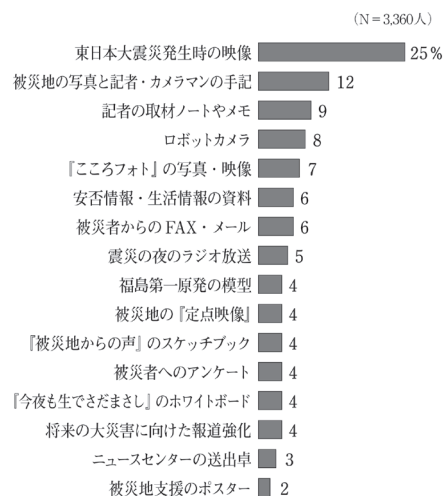


図3 印象に残った資料や展示物（複数回答）

「印象に残った資料や展示物は何か」という設問（複数回答）に対しては、「東日本大震災発生時の映像」が25%で最も多かった。次いで「被災地の写真と記者・カメラマンの手記」が12%、「記者の取材ノートやメモ」が9%となっていた。アンケートの自由記述欄にも、通常目にするのではない記者の手書きの取材メモや記者やカメラマンの思いを綴った手記が印象に残ったという感想が多くみられた。年代によっても回答に若干の違いがあった。30代は「震災の夜のラジオ放送」、40～60代は「安否情報・生活情報の資料」、70代以上は「福島第一原発の模型」が印象に残ったと回答している人が多い。

自由記述を整理すると、震災の記憶の風化を懸念し「これからも伝え続けてほしい」という趣旨のコメントが60

件以上あった。また、同様の展示を「全国で行ってほしい」「定期的に行ってほしい」「常設化してほしい」という意見も目立った。アンケートにはNHKに好意的な人が多く回答している可能性があり、完全にニュートラルな調査とはいえないが、自由記述の多くが展示内容に対して評価するコメントを寄せていることから、特別展を開催したことに一定の意義があったと考えられる。

Ⅷ 今後に向けて

～震災報道資料の活用～

特別展は閉幕したが、「震災報道アーカイブ構想」はこれで終わったわけではない。

来場者のコメントにあるように、これらの資料をより多くの人に見てもらい、東日本大震災を風化させないこと、必ずやってくる次なる巨大災害に備えることを訴え続けていかなければならない。

その一環として、2018年2月4日にオープンした仙台局の新会館には恒久的な「東日本大震災メモリアル」コーナーが設けられ、特別展の展示物の一部が活用されている。



仙台局の「東日本大震災メモリアル」コーナー

展示・公開以外の活用も重要である。今回集まった資料の中には、放送に携わる職員やスタッフにとって貴重な教訓となるものが少なくない。特別展の会期中には、研修中の新人記者・アナウンサーも見学に訪れた。また、前述した

仙台局の「東日本大震災メモリアル」コーナーも、新人研修に利用される予定である。これらの資料を、今後の災害報道の向上に生かしていく方法をさらに検討していかなければならない。

「放送」、なかでも「報道」は、常に新しいものを追いかける仕事であるだけに、過去の資料は無用の物として置き去られ、消え去っていくことが多い。しかし、それら残滓のなかにも、かけがえ

のない記憶や記録、経験、教訓があり、見る人の心に響くものがあるということとを、今回の特別展を通じて改めて学んだ。東日本大震災から7年が経つが、「伝え続けてほしい」という多くの来場者の声にどのように応えていくか。今後ともこうした課題に向き合っていきたい。

(いりえ さやか/ひがしやま いちろう/みつもの のぼる)

アーカイブおよび特別展に関わったプロジェクトのメンバーを下記に記す(所属は当時)。

▶ 讃岐好伸、三森登(東日本大震災プロジェクト)、▶ 山崎真一、菅井賢治、阿部千恵子、戸田有紀(報道局)、▶ 入江さやか、東山一郎(NHK 放送文化研究所)、▶ 堀田伸一、谷内美穂、和田源二(NHK 放送博物館)

本稿の執筆は、I・III・VI-2・VII・VIIIを入江さやかが、II・VI-1を三森登が、IV・Vを東山一郎が担当した。

注:

- 1) NHK 経営企画局「視聴者のみなさまへ～平成22年度の取り組み～」(2011年6月)
- 2) 詳細はNHK 放送文化研究所ブログ「#68 NHK 送博物館 特別展『東日本大震災 伝え続けるために』」(2017年3月)
<http://www.nhk.or.jp/bunken-blog/2017/03/03/>
- 3) いわゆる「震災関連死」を含む。

4) NHK 放送博物館はNHK 放送文化研究所所管の施設で、企画展の制作などは両者の共同作業で行っている。

5) JNN (2012)『オムニバス・ドキュメンタリー 3・11 大震災 記者たちの眼差し』(TBS サービス)ほか

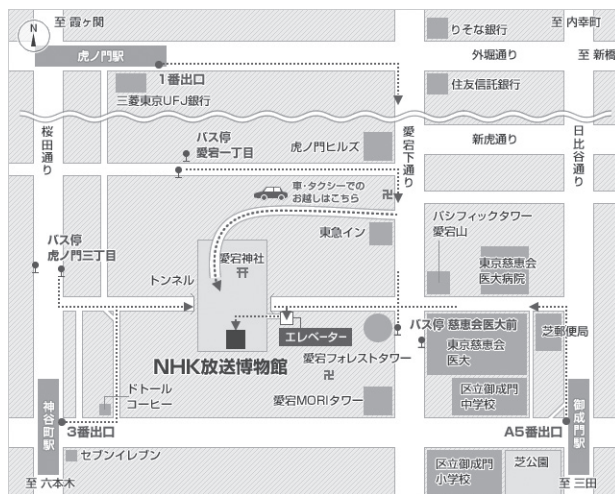
6) NHK スペシャル『映像記録 3.11～あの日を忘れない～』(2012年3月4日放送)

7) 『被災地からの声』
<http://www.nhk.or.jp/sendai/hisaichikara/>

8) 「5YEARS FROM 3.11『定点映像』2011-2016」
<http://www.nhk.or.jp/dnavi/link/5years/>

9) 『こころフォト～忘れない～』
<http://www.nhk.or.jp/kokorophoto/>

10) 詳細はNHK 放送文化研究所ブログ「#73 3.11 その時キャスターは～命を守ることは～」(2017年4月)



NHK 放送博物館

休館日: 月曜日(月曜日が祝日・振替休日の場合は火曜日休館)、年末年始

入場料: 無料

開館時間:
午前9時30分～
午後4時30分

所在地:
〒105-0002
東京都港区愛宕2-1-1
TEL: 03-5400-6900